朝鮮のこころに寄せて——松本清張

金思燁氏はわたしの尊敬する畏友である。氏は上代朝鮮語の権威で、ハーバード大学でも現在の大阪外語大でも客員教授としてそれを学生たちに教えてきている。わたしもまた古事記・日本書紀・万葉集等に出てくる上代朝鮮語の和様化について教えを受けている。氏の日本語文章は本書に見る通りまことに流麗である。氏の日本上代歌謡に関する造詣はすでに専門学者なみで、本書の訳文の旋律的、原文のニュアンスの伝え方の巧緻なる所以である。日本と朝鮮の文化の相似性、その関連性をもっとも素朴な詩歌でこれを愉しみながら知ることができる。日本に初めて紹介される歌ばかりで、その撰択、飜訳ともに現今最高の適任者を得たというべきであろう。

●キム・サヨブ

一九一五年韓国慶北に生まれる。
一九三八年京城大学文学部卒業。
朝鮮語文学専攻、文学博士。
韓国のソウル・東国・慶北の各大学教授、
米国ハーバード大学招聘教授をへて、
現在大阪外国語大学客員教授・京都大学講師。
主な著書として『朝鮮文学史』〈日本文〉—北望社、
『李朝時代の歌謡研究』〈朝鮮文〉—学園社—など。

·156893-2253(0)

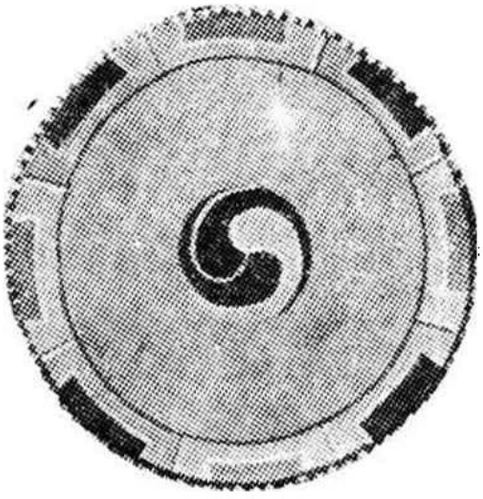
定価＝260円

朝鮮のこころ
定価——二六〇円　昭和四七年九月二八日第一刷発行
著者——金　思燁
©Sa-yeup Kim 1972 Printed in japan
発行者——野間省一　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二　電話〇三—九四五—一一一一　振替東京三九三〇
装幀者——杉浦康平＋辻修平
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
落丁本・乱丁本はおとりかえします

0298-156893-2253　(0)　(学1)

朝鮮のこころ

民族の詩と真実



金思燁

まえがき

朝鮮の歌、なかでも新羅の歌謡、郷歌(ヒャンガ)については、日本の学者による研究論文や著書が早くから発表されている。金沢庄三郎・鮎貝房之進・小倉進平・土田杏村(きょうそん)・三品彰英らの諸氏である。このうち小倉進平博士の『郷歌及吏読研究』は郷歌全部について完全な解読を試みた画期的な大著であり、土田杏村氏の「記紀歌謡における新羅系歌形の研究」(『上代歌謡』)は、郷歌載っている古歌謡におよぼした影響を究明した卓論である。

高麗・李朝時代の歌に関しては、李朝初期の長篇歌謡「竜飛御天歌」について、語学的試みた前田恭作氏の『竜歌古語箋』の一書があるのみである。

し、これらの論著は専門的な研究書であって、一般向きの歌の訳書などは日本においてになされていない。朝鮮人の心情を吐露した歴代(二千年の間)の歌は、その首数も少な文学的価値や歌形の多様性などは、けっして隣国の日本、中国のそれにくらべて劣るはなく、朝鮮の文化一般が概して中国の影響を強く受けている中で、歌だけはわりあい言力が弱いもので、したがって朝鮮的情調の濃いものである。

の数多い歌形のなかの代表は時調(シジョ)であり、これは新羅の歌謡、郷歌(ヒャンガ)から変形したもの

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

で、高麗の初めごろ発生してから、以後千年近くもつづいてきて、今日もなお詩壇の一部に確固たる地位を占めてさかえているのである。この歌形の変遷過程、特徴、その生命力の長いことなどは日本の和歌に酷似している。それに作品も二千首以上が今日伝わっている。これが今年になってから、田中明氏によって、『朝鮮文学』（朝鮮文学の会の同人誌）誌上に、数首が訳されて載ったのが、日本では最初の紹介である。

朝鮮人の喜怒哀楽、もののあわれ、死生観、民族愛などを赤裸々に吐露したこれらの歌を、なんとかして日本のかたがたに読んでもらいたかったのは、筆者のかねてからの念願であり、歌をとおしての朝鮮観、朝鮮人観は、歴史書などによる場合とは異なる、直截的で明快、かつ正確なものだと信じている。

また今日日本に同居している六十余万の在日朝鮮人は、母国の歌に接する機会が少なく、まして難解な古語でつづられている歴代の歌にいたっては、なおさら鑑賞の機会は絶無である。中でも二世・三世は、日本の古歌謡を読むことはあっても、母国の歌とはかかわりがない。

以上二つの理由は、筆者をして拙著を書かせた動機である。

さて、多くの歌の中から少数の作品を精選するという作業は、予想外の難題である。いちおう愛情を主題にした歌に重点をおいて選んでみたが、歌謡変遷史上、問題となった作品を除外するわけにはいかなかった。時調の場合は、現在朝鮮で遊ばれている「うたカルタ」（百首の時

調）に採用されている歌を中心にして八十首をえらび、それに長時調（ジャンシジョ）（庶民の歌、散文時調）から二十首をえらんで百首とした。

筆者の意図に賛成して歌の訳に協力してくださった田中明氏が、仕事の途中、急遽韓国へ長期旅行に立たれたため、残りの歌の訳について十分審議をつくしえなかったのは心残りである。しかし、田中氏の協賛は忘れることができない。心から感謝の言葉を述べる。

この小著はこのまま、朝鮮歌謡史でもある。したがってこの方面に興味と関心をもっておられるかたに、ひとつの参考資料ともなれば、望外のしあわせである。

おわりに本書の成るは、松本清張先生のご助言、講談社の学芸局長・加藤勝久氏をはじめ、田代忠之氏らの厚いご配慮の賜物である。ここに謝意を表す次第である。

一九七二年盛夏

金　思燁

目次

まえがき――3

1―三国および統一新羅の歌――11

高句麗・百済の歌――12

1―黄鳥歌（うぐいすのうた）〈高句麗〉 12

2―井邑詞〈百済〉 15

郷歌（ヒャンガ）〈新羅〉――17

1―薯童謡（マトンノレ） 17

2―願往生歌 22

3―竹旨郎（デマラ）を慕いて 29

4―亡き妹を悼（いた）みて 33

5―盲（めしい）の児（わらべ）の祈り 34

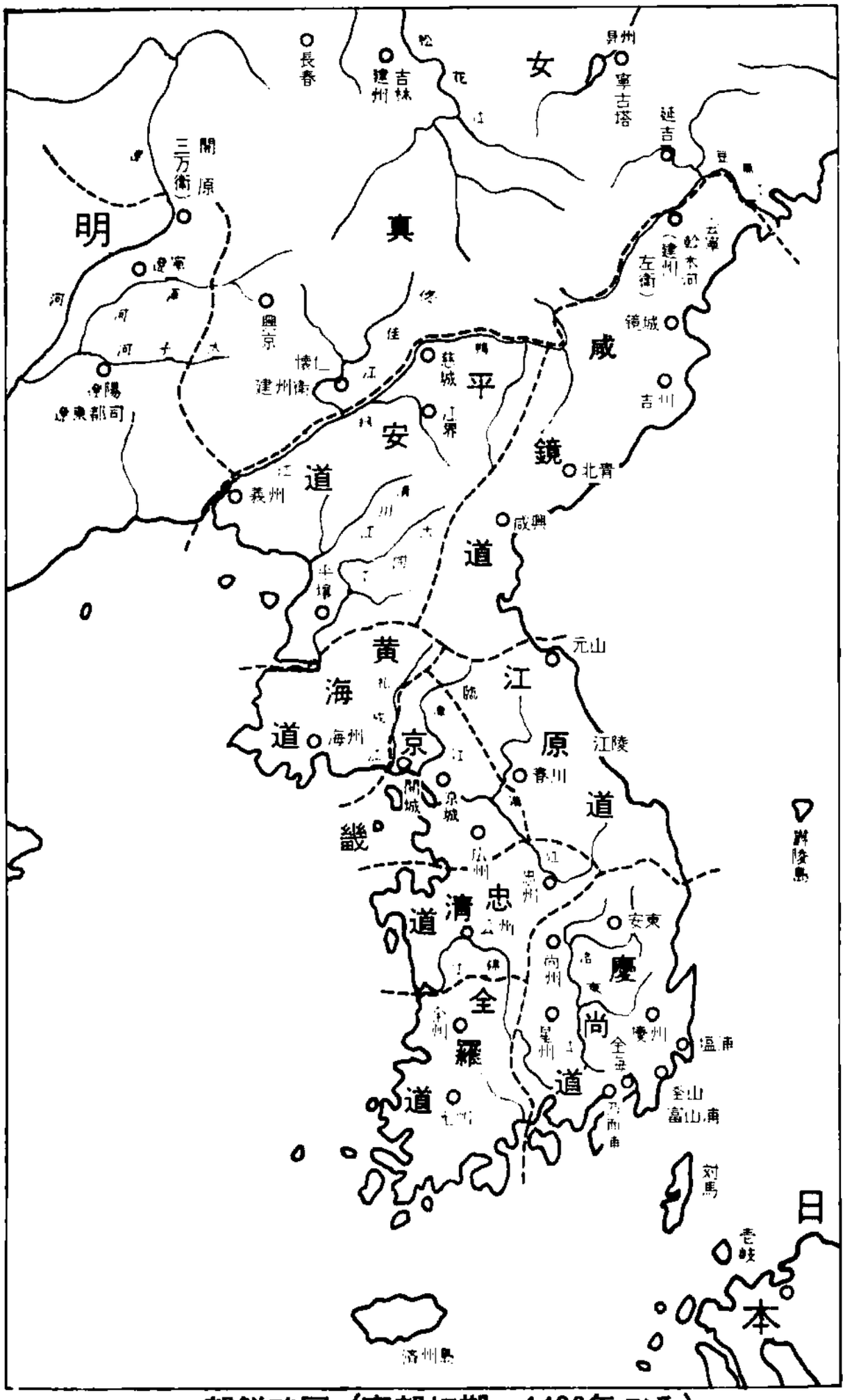
6―処容歌（チョヨンノレ） 37

解説――41
1―詩歌の発生 41
2―歌のリズム〈形式と韻律〉 67
2―高麗の歌――71
1―動動（ドンドン）〈君の幸を祈る歌〉 72
2―双花店（サンファジョム）〈饅頭売り〉 80
3―西京別曲〈愛の誓い〉 85
4―青山別曲〈生の悲しみ〉 88
5―霜を履む曲〈君を思う歌〉 92
6―カシリ〈別離の歌〉 95
7―鄭瓜亭（チョンクワジョン）〈君主を恋うる歌〉 97
8―鄭石（ディンドルのノレ）歌〈君が代〉 100
9―長岩（ジャンアム）〈網にかかれる子雀〉 104
10―居士恋（コサリョン）〈いとしの君〉 105

11—済危宝（ジェウィボ）〈手を握りし君〉 106
12—沙裏花（サリフワ）〈人民の苦しみ〉 107
13—少年行〈幼き日の思い出〉 108
14—木鶏歌〈老いゆく母を悲しむ〉 109
15—耽羅謡〈済州島人民の歎き〉 110
解説——112
1—高麗歌謡の概観 112
2—均如大師の仏教讃歌 118
3—朝鮮語による歌謡 119
4—漢訳された歌と民謡 124
5—麗謡のリズム 129
3—李朝の歌——133
時調（シジョ）——134
1—有名氏作 134

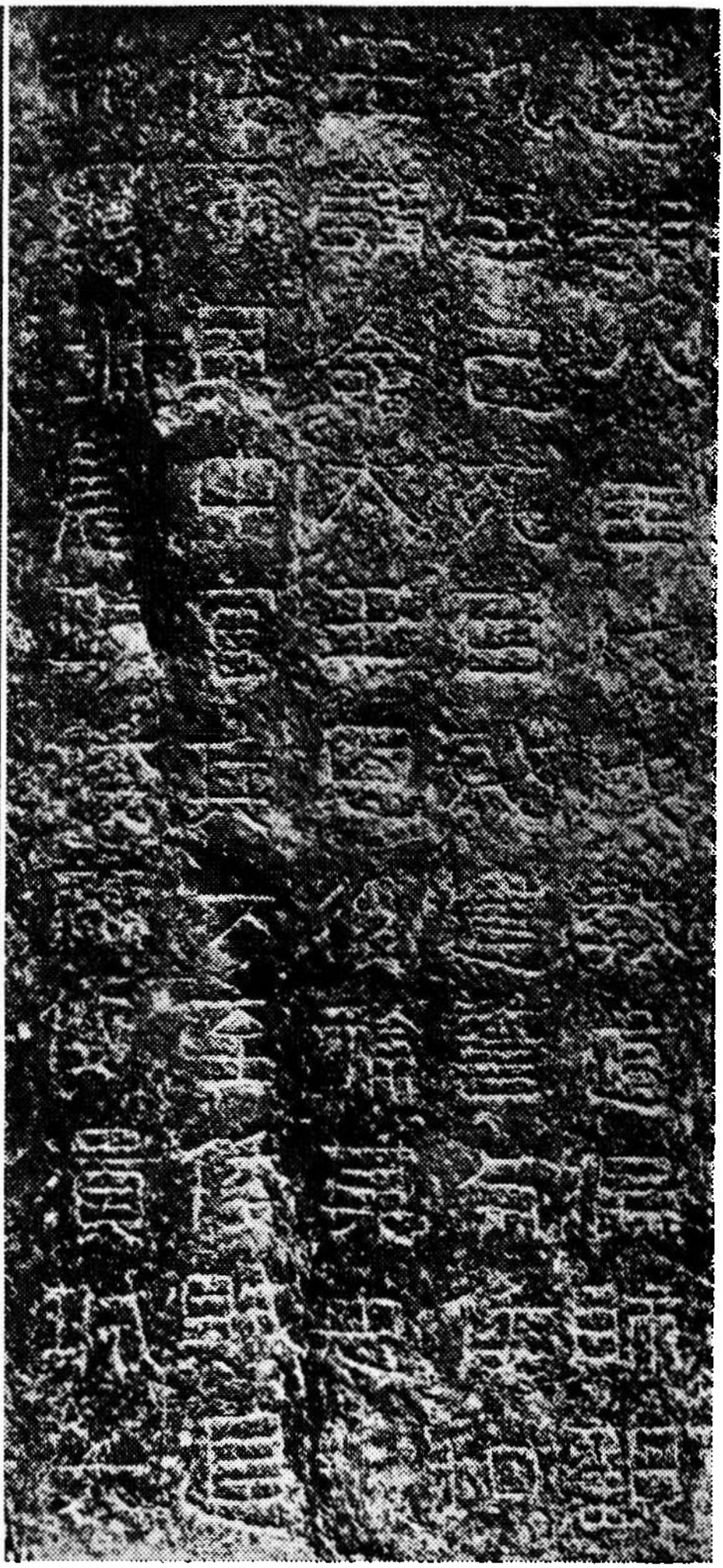
2—無名氏作 180
3—長時調 184
解説——196
1—竜飛御天歌と月印千江之曲 196
2—時調 202
3—歌辞(カサ) 211
4—時調と歌辞の形式 219
朝鮮文学略年表——222

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



朝鮮略図（李朝初期・1430年ごろ）

1 ―三国および統一新羅の歌



好太王碑文

高句麗・百済の歌

1——黄鳥歌〈高句麗〉

飛び交う　うぐいす
いもとせは　寄り添う
われはしも　ひとり
誰とともに　帰らん

最古の歌　高句麗の二代の王、瑠璃王の作。王の三年（一七B・C）に作られ、朝鮮人の作品としては文献上最古のもの。この歌の由来は次のとおりである（三国史記巻十三・高句麗本紀第一・瑠璃王三年の条）。

王妃の松氏が亡くなると、王は二人の女を娶った。一人は禾姫といって高句麗の娘であり、もう一人は雉姫といって漢人の娘であった。二人の女は王の寵愛を競い、たがいに反目して仲がわるかった。それで王は涼谷という所に二つの宮殿を建て、別々に住まわせた。あ

狩猟図（舞踊塚壁画）

るとき、王が狩りに行き、七日たってももどってこなかった。この間二人の女は、口げんかをして争っていたが、禾姫が雉姫にむかって、

「おまえはいやしい漢家の婢（はしため）でありながら、どうしてそんなに無礼であるのか？」

とののしった。雉姫はこれをきいてひどく恥じいり、彼女を恨（うら）みながら宮殿をにげ出してしまった。王はこの二人のけんかを伝え聞き、馬を走らせて雉姫のあとを追ったが、彼女は怒ってふたたびもどろうとはしなかった。王が木の下で休んでいると、たまたまその木の枝に黄鳥（うぐいす）が飛んできて仲むつまじく、おすとめすが寄りそうようにしてさえずった。それを見てうたったのがこの歌である。

失恋のいたで　王が愛妻雉姫に逃げられ、失恋のいたでをうぐいすにことよせてうたった歌であるが、紀元前一七年ごろすでに叙情の歌があらわれたことは、文学史上、詩歌の発達の過程から見て、注目すべきことがらである。

この歌に題材されている「黄鳥」（朝鮮語・クェコリ）は、古来中国・朝鮮・日本の古典歌謡にはともに早くからうたわれていて、詩経（しきょう）にも秦（しん）風の黄鳥篇、小雅の黄鳥詩に見え、日本の古歌謡にも、慣例的に取題されて、春告鳥、歌よみ鳥、花見鳥などの異名でもって多くよまれていることは周知のとおりである。

朝鮮の場合は中国の詩歌の例とは違って、鳳凰、鴛鴦（おしどり）などの祥鳥とともに、夫婦の睦じい仲にたとえられてうたわれている。

古歌謡にうたわれた鳥　朝鮮の古歌謡に多くうたわれている鳥類を列挙してみると次のとおりである。

ほうおう（鳳凰）・おしどり（鴛鴦）・うぐいす（黄鳥・黄鶯）・かり（雁）・ひばり（雲雀）・ほととぎす（杜鵑・子規）・こうのとり（鸛鳥）・しらさぎ（白鷺）・つばめ（燕）・たか（鷹・山鷹・若鷹・くまたか）・かっこうどり（郭公鳥）・はと（鳩）・かも（家鴨）・にわとり（鶏）・すずめ（雀）・からす（烏）・かささぎ（鵲）・きじ（雉）・つる（鶴）・かもめ（鷗）・たいほう（大鵬）

2——井邑詞〈百済〉

月よ　高みに昇り給え
あゝ、四方遠く照らし給え
　アオ　タロンディリ
ぬしは市に通うらん
あゝ、泥濘に足とらるな
心しずかに　せくまいぞ
　オキヤ　オカンジョリ
ぬしの夜道に胸さわぐ
　オキヤ　オカンジョリ
　アオ　タロンディリ

市をめぐる　古来朝鮮では各農村の小都市に、日を異にして、たいがい五日ごとに市が立つ。多くの行商人が各地の市が立つ日に朝早くたどりついて商売をし、それで生計をたてていたのである。この歌の舞台となっている朝鮮の南西部（忠清南・北道、全羅南・北道）は、気候がもっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com